

# プレカリティ指標をもちいた職業経歴の不安定度とその影響の分析

大阪市立大学 川野英二

## 【1. 目的】

フランスでは「排除」は80年代以降に運動や政策現場で普及した言葉である。とくにオイル危機以降の大量失業の時代に、これまでとは異なるかたちの「新しい貧困」が「新しい社会問題」として登場したさいに「排除」が問題となった。その後EUがこの言葉を採用して以来広まったが、R・カステルやS・ポーガムなどの社会学者たちは、当時から「排除」は極限的な概念であるとし、「不安定化 precarisation」のプロセスを重要視していた。このように「排除」をめぐる議論は、欧州では「内と外」の問題ではなく、その連続性とプロセスが注目されてきたが、日本の議論では現在でも「排除/包摂」という二項で言及されることがしばしばみられる。本報告では、このような関心を踏まえて、雇用のプレカリティについて、プロセスを重視した分析をおこなう。

## 【2. 方法】

職歴の分析には、アボットらの最適マッチング法を用いた「シーケンス分析」などがある (Abbott,2000)。報告者は、2019年に実施したウェブ調査「暮らしと意識についてのアンケート」で収集した職歴データをもちいてシーケンス分析をおこない、分析のさいにはプレカリティの程度を測定する「プレカリティ指数」(Ritchard.G.,Bussi.M.and O'Reilly.J, 2018)を適用した。その後、プレカリティや過去の失業経験などがどの程度現在の生活満足度や抑うつ傾向などに影響を与えるのかについて、プレカリティ指数を説明変数とした多変量解析をおこなった。

## 【3. 結果】

分析の結果、年代別では35-45歳未満のコーホートでプレカリティ指数が高いことがわかった。しかしこの結果がいわゆる「ロスジェネ世代」の不安定を唆しているのかはさらに検討が必要である。また、プレカリティ指数が高いほど抑うつ傾向が高いが、過去の失業経験を投入したモデルでは、現在就労中であっても、過去の失業経験が抑うつ傾向を高めていることもわかった。

## 【4. 結論】

従来、シーケンス分析では、職歴の不安定性については複数の指標が考案されてきたが、いずれも職歴変化については考慮しても、職歴が不安定化するプロセスを適切にあらわしてはいなかった。今回分析に使用したプレカリティ指数は、その点で、下降的な移行を考慮した分析が可能であることが示された。

## 【文献】

Abbott. A.and Tsay. A., 2000 "Sequence Analysis and Optimal Matching Methods in Sociology, Review and Prospect", Sociological Methods and Research, 29(1): 37-33.

Ritchard.G.,Bussi.M.and O'Reilly.J, 2018 "An index of Precarity for Measuring Early Employment Insecurity", Ritchard. G and Studer.M.,(eds.), Sequence Analysis and Related Approaches, Springer.

Paugam S. 2005 Les formes mentales de la pauvreté? PUF. (セルジュ・ポーガム 2016 『貧困の基本形態——社会的紐帯の社会学』新泉社 川野英二・中條健志訳)

Castel, R.1995 Les Métamorphoses de la question sociale. Une chronique du salariat Fayard (ロベール・カステル 2012 『社会問題の変容』ナカニシヤ出版 前川真行訳)